

## 靖国神社法案に反対する決議

—靖国神社国営化阻止闘争のさらなる展開のために—

われわれは、前72国会において行なわれた、たび重なる自民党のファッショ的暴挙—衆議院における靖国神社法案強行採決に対し、新たなる怒りをこめて、この暴挙を弾劾する。そして靖国神社の国営化を阻止するために、総力をあげて闘い続けることを決意する。

省みれば、戦後30年になろうとする日本の国家社会の動向の中で、この法案ほど歴史の流れに逆行し、戦後民主主義及び平和憲法を真向から否定するものはない。

一片の審議も経ずに、自民党の数の暴力によって、内閣委員会はおろか衆院本会議をも通過成立するというこの恐るべき現実、いつしかわれわれにあの戦前のファッショ政治をも想起させるものとなった。

戦前、そして戦時軍部独裁、ファッショ政治のもとに推し進められた軍事力を背景とする日本のアジア諸国への侵略政策に対し、われわれは何らの批判をもなしえぬまま沈黙し、その政策を支持するものとなってしまった。

このような過ちを、われわれは決して繰り返してはならない。アジア諸国からの指摘をまつまでもなく、この靖国神社法案の背後にあるものは、明らかな日本軍国主義の復活である。

戦後の日本経済は朝鮮戦争ベトナム戦争というアジアの民衆を収奪しつつ成長してきた。そして、今やアジアに対する支配を貫徹するために、軍事力の増強をはかり、そのための精神的支柱として靖国神社法案を必要とし、その成立を強行しようとしている。

この法案は、戦争犠牲者を神格化し、靖国神社に祀ることを通して、かつての侵略戦争を美化するとともに、新しい戦死者を英霊として迎え入れる準備をし、その祭祀を国民に強要する法案である。

われわれは主なるイエス・キリストにより人間の尊厳と自由を知らされた者として、基本的人権の根幹をなす「信教の自由」を侵すこのような動きに対し、断固として反対の意志を表明するものである。

われわれ日本のキリスト者は、愛すべき祖国を再び、軍国主義の犠牲に供してはならない。戦没者及び残された遺族、又われわれにとって、ただ一つの共通な願いは、日本、アジア、そして全世界に真の平和を確立することである。

1974年7月26日

日本バプテスト連盟第28回年次総会